國學院大學学術情報リポジトリ

〔書評〕斎藤達哉著『国語仮名表記史の研究』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 銭谷, 真人, Zeniya, Masato メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000665

〔書評〕

斎藤達哉著『国語仮名表記史の研究』

銭谷真人

本書のタイトルには「仮名表記史」とあるが、漢字表記についても取り扱っている。ある語を仮名で書くか、漢字で書くか、そこには既に書写者の「書写態度」が反映されているからである。平仮名で書かれる場合は、さらにそこに書写者の「字体認識」も看取される。本書は膨大な仮名資料の調査を通じて、客観的に表記を分析し仮名表記の実態に迫り、「字体認識」「書写態度」を明らかにしようと試みたものである。

本書は四部構成となっている。第一部「国語仮名表記史の研究―目的・用語・資料・方法―」においては、先行研究を引用しながら、標記の事柄について述べている。ここで「字種」「字体」「字形」「字型」と、本書を読む上でひいては仮名表記研究を行う上で、重要となる概念について解説している。「字種」は所謂字母レベルでの分類であり、「字種」は同じでも著しく「字形」が異なる場合は、別の「字体」とみなされることがある。また矢田勉（二〇一二）『国語文字・表記史の研究』（汲古書院）で提唱された「字型」を取り上げ、「字種」が異なる「字体」であっても、「字型」（見た目）の近似によって識別が難しい場合があることにも触れている。第一部ではまた「表記情報学」についても言及している。著者は明言を避けているが、評者は本書の研究は「表記情報学」に該当するものと考える。そして今後表記情報が組み込まれたコーパスが整理されれば、この分野の研究はさらに盛んになるであろう。本書は表記情報コーパスを構築する上での参考にもなる。

第二部「仮名資料の文字調査」の第一章から第三章においては、『源氏物語』「花散里」諸伝本67本の文字を集計し、「漢字含有率」「仮名字種数」から客観的に表記の比較を試み、表記による伝本の分類を行っている。伝本同士の比較はこれまでも行われてきたが、語のレベルでの比較であり、表記レベルでかつこれほどの規模での比較は、本書が初めてであろう。第一章においては、集計の結果から、「花散里」の「常用漢字」「常用仮名字体」を見出している。表記研究においては現代の表記を基準に考えがち（またそう考えるしかない場合もある）だが、

伝本におけるスタンダードを明らかにすることによって、各伝本の表記的な特徴がより明らかになるのである。第二章では、各伝本の「漢字含有率」「仮名字種数」の違いから、何が読み取れるのかについて言及している。そして図を作成し、「『漢字含有率』と『仮名字種類数』に基づいて散布図を描くことで、本文グループにおける、書写態度のおおよその傾向はつかむことができる。」（p90）としている。これは非常に納得のいくものであり、著者の精緻な調査の賜物である。第三章においては、字種《志》の機能による諸伝本の分類を試みている。4群に分別でき、同じ群にまとめられた伝本は表記システムの先後関係を示すものではないとしつつも、「伝来、書写集団、媒体に共通性を持つ可能性を示し得た」（p108）としている。字種《志》に書写者の語に対する分節意識が反映されていることは、評者も自身の研究で実感しており、首肯できる結論である。ただここまでの章で気になった点が二点ある。一つは字種レベルでの比較で良いのかという点である。これについては著者も言及しているところではあるが、やはり字種《可》《多》などには、字体の区別が明確なものもあり、気になるところである。研究が行われた当時は字種による分類が最善であったかもしれないが、現在は本書でも紹介されている学術情報交換用変体仮名もある。これを適用するとどうなるか知りたいところである。もう一点は、古活字・板本についてである。本書では写本とともに扱われるが、第二章においては除外されていた。表記という観点からでは、伝本の内、古活字・板本はどのように位置づけられるのか。その点について個人的にも興味があり、言及してもらいたかったところである。第四章では、これまでの方法を利用して、専修大学蔵の『源氏物語』「桐壺写本」の性格を分析している。ここでは前述の「字型」の類似によって、字体を取り違える可能性があるという点についても言及されている。また巻末には翻字が掲載されているが、これは研究者間での共有や電子処理ができるように配慮されたものである。第五章では、近い関係にある二写本の比較が行われている。結果、「仮名字種（異体仮名）は、《書写者の恣意によって変換可能な情報》であった。」（p182）と結論付けている。当たり前のことのように思われるかもしれないが、これも実際に調査を行わなければ分からないことである。

第三部「語と用字」においては、「語」とその表記に用いられる「文字」の結びつきについて論じられている。第一章から第三章では、同音異体の仮名に「位置による仮名の使い分け」があるか、ハの仮名を用いて検証している。ハの仮名はハ行転

呼音や係助詞との結びつきが考えられ、検証に適していると言えよう。第一章では、議会図書館本『源氏物語』ハの仮名《者》《八》《盤》《は》の用字について、「字種《者》に分節機能を担わせる傾向」の有無があったのかについて論じられている。「図3には、/Φa/、/wa/、/ba/のそれぞれの音韻について、ハの仮名のどの字種が用いられているかを実数で示した。」（p192）とあり、音韻によって使用される位置がある程度定まるので妥当である。ただbaは図4（p199）でさらに分類を試みているが、waについても係助詞等の下位分類をしてみても良かったのではないか。経験的に《八》は汎用性があり、《盤》は係助詞に限られるというようなことがある。図4でbaについての分析が詳細であっただけに、入れておいてもらいたかった。行頭の係助詞には《盤》のみが用いられているが、これにも法則が見いだせないだろうか。《者》に注目したためにあえて論じなかったのかもしれないが、競合する字種の傾向から見えてくるものもあるのではないだろうか。結論自体は首肯できるものである。第二章では、議会図書館本『源氏物語』から「ケハヒ」「カタハライタシ」の2語を取り上げ、語と用字の関連性について検証している。これまでの研究では、助詞や助動詞といった付属語と用字の関連性は論じられてきたが、自立語と用字の関連性についてはあまり言及されてこなかった（符牒化とみなされることが多い）ので、興味深い視点である。ハの仮名に「揺れ」が生じる背景について、ハ行転呼音との関連性が述べられており、前章においてハの仮名の音韻による使用傾向が示されていたこともあって、納得のいく説明である。ただこれらはハ行転呼の特殊な例として取り上げられているが、一般的なハ行転呼の場合はどうであったのか。「偏り」のみで「揺れ」はなかったのか、興味深いところである。第三章では、『足利本仮名書き法華経』（足利本）のハの仮名字種の「意識的な使い分け」について再考している。「使い分け」については、主観的な視点がどうしても入る。そこで著者は、前後の文字が字種の選択に及ぼす影響について考察する。さらに先行する文字からの連綿率、後続する文字への連綿率についても調査を行っている。結論について著者は慎重な立場を取るが、これらの観点は、手書きの資料を扱う上で、今後の研究者も考えていかなければならない問題である。第四章、第五章においては、仮名資料の中での漢字の問題について論じている。第四章では、足利本の頻出漢字と、他の仮名書き資料の使用漢字とを対照させることによって、足利本の漢字字種の性質を考察している。その結果「仮名書き主体の文章での定着度の高い漢字」（訓よみ）

と「（仏教という）ジャンルの特徴漢字」（音よみ）に大きく二つに分けられることが判明している。経典を訓読して仮名書きにしたという足利本の性質に鑑みると、納得のいく調査結果である。第五章では、漢字が仮名の影響を受けた字体に変形することについて、国会本『平家物語』および龍門文庫本『宇治拾遺物語』に見られる「候」の省略字体の調査を通じて考察している。省略字体「候」を使用しても読みにくくならないことの担保について、様々な可能性を検証した結果、「敬語動詞は漢字表記の傾向が強いものであることに加え頻出する」（p276）ことではないかという結論に至っている。敬語動詞が漢字表記されるという点は首肯できるが、それが担保となるかについては疑問が残った。「候へ」で合字のように用いられ、後に「候」の部分だけ独立して用いられるようになったものであろうか。

第四部「字体認識・書写態度の展開」においては、書写者側の認識・態度について論じられている。第一章では、「『説目抄』類の「位置による仮名の使い分け」―仮名字体の誤認の拡大―」と題し、何故誤った認識が広まったのか、複数の伝本を比較することにより、その背景に迫る。「使い分け」を説明する上で、仮名を単字表記したことで、「字型」の似た仮名を誤認したという指摘は、連綿が行われることが多かった当時の状況に鑑みると、的を射たものである。章末の対照表からも「字型」が鍵となることが納得できる。第二章では、明治期に書写された麦生本『源氏物語』の転写本を原本と比較し、「『同字母異体の仮名について字体差を区別する書写態度が見られるのか』という問題意識のもとに比較と考察」（p327）を行っている。そして字種のレベルではほぼ一致するが、字体のレベルでは一致するものとしないものがあるとの結論に至っている。このような結果を見ると、やはり第一部における『源氏物語』諸伝本の比較において、字体レベルではどうであったのか気になるところである。第三章では、一九〇〇年の「改正小学校令施行規則」の「第一号表」普及の過程における誤植と、手書きにおける仮名の標準的な字体であった「いろはがな」の字体との関係について論じている。著者は未発見の資料であった『仮名字類集』を用いて、「いろはがな」の標準字体が同時代まで継承されていたことを明らかにしている。そして民間印刷の「第一号表」においては、「いろはがな」の字体が誤植されていることを指摘している。「「第一号表」の普及過程での〔え〕／〔江〕、〔お〕／〔於〕、〔そ〕／〔曽〕、〔と〕／〔止〕のそれぞれの違いは、「近代」と「前近代」の違いが可視化されたものと捉えることができる」（p363）との結論は首肯できる。ただ仮名によって少々

事情が異なっていた可能性もある。評者の感覚では、〔江〕〔於〕〔曽〕に比べて、〔止〕は明治期の活版印刷においても、使用頻度が高かったように思う。印刷の観点から、考察する余地があるかもしれない。第四章「傍記から訳文へ―『新編紫史』と『源氏物語評釈』―」では、明治期の『源氏物語』の「翻訳」を取り上げ、底本では傍記であったものが、訳文の中に取り込まれる場合があることを明らかにしている。これまでとはやや趣を異にするが、「書写態度」についての考察の一環である。底本の傍記を本文に組み込むことによって訳文が成立していることを明らかにした上で、教育的な配慮から俗語的・口語的な表現が排除されていることが指摘されている。なお第二章から第四章においては、資料の書写者や著者の人物像にまで迫った上で、資料の性格について明らかにしており、その詳細な記述は瞠目に値する。

ここまでの記述において、評者の見識不足、読み違いなどから、的外れな指摘があったかもしれないが、ご容赦願いたい。一次資料の表記情報をデータ化し、計量的に分析を行う研究（「表記情報学」と言い換えても良いかもしれない）は、今後ますます発展するものと思われる。本書はそれに携わる研究者に是非読んでおいてもらいたい一冊である。

（A5判上製、四二〇頁、武蔵野書院、二〇二一年二月発行、定価一二〇〇〇円＋税）